

氏 名(本 籍) ^{かわ かみ しやう しゆう}河 上 正 秀 (富 山 県)

学 位 の 種 類 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 博 乙 第 1,299 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 9 年 6 月 30 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当

審 査 研 究 科 哲 学 ・ 思 想 研 究 科

学 位 論 文 題 目 ドイツにおけるキルケゴール思想の受容
— 20世紀初頭の批判哲学と実存哲学 —

主 査 筑波大学教授 水 野 建 雄

副 査 筑波大学教授 文学博士 廣 川 洋 一

副 査 筑波大学教授 Ph. D 荒 木 美智雄

副 査 筑波大学教授 洲 崎 恵 三

副 査 筑波大学助教授 文学博士 笹 澤 豊

副 査 桜美林大学教授 文学博士 湯 浅 泰 雄

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、S. キルケゴールの思想が20世紀初頭のドイツ批判哲学および実存哲学の初期思想のうちにいかに受容されたかについての受容史研究であり、その目的は、主として次の二点にある。第一は、これまで否定的消極的意味において理解されてきた初期批判哲学のキルケゴール受容が、批判哲学形成のうえてむしろ積極的意味を持っていたことを包括的に明らかにすること、第二は、従来必ずしも明確でなかった初期実存哲学における受容の真相を、新たな資料に基づいて可能なかぎり正確に再現することである。

本論文は、序論、第1部「初期批判哲学のキルケゴール思想の受容」(第1章～第4章)、第2部「初期実存哲学のキルケゴール思想の受容」(第1章～第3章)および結論から構成されている。

序論では、上記両哲学におけるキルケゴール思想の受容および両哲学の拮抗関係が、キルケゴール思想の宗教的意味をめぐる問題として、とくに「主体性」と「実存」概念を根底にして展望しうることが論じられるが、その際、キルケゴール受容史において実存哲学における受容を主流とし批判哲学におけるそれを傍流とみなす従来の主導的見方を払拭して、全体的総合的な視点の確保が必要であることが語られる。

第1部では、初期批判哲学におけるキルケゴール思想受容の諸形態について、とくに「主体性」概念に対するG. ルカーチの批判的提起をH. マルクーゼ、E. ブロッホが継承、発展させ、それがT. W. アドルノにおいて総括的に結晶していく過程が中心的主題として論じられる。

第1章「初期ルカーチのキルケゴール論」では、ルカーチはキルケゴールにおける単独者的「主体性」概念が歴史のなかで挫折せざるをえないことを、人間の生の弁証法的制約に基づいて批判的に解明したが、このルカーチによって確立された「主体性」概念に対する固有の歴史哲学的批判的方法が、以後の初期批判哲学における受容史上の基礎形象となることが論じられる。

第2章「初期マルクーゼの受容」では、マルクーゼがルカーチによる批判的方法をM. ハイデガーの現象学と統合させることを通じて、独自の歴史哲学的・実存論的キルケゴール像を開拓していったことが論じられる。

第3章「初期ブロッホの受容」では、ブロッホ固有の神秘主義的傾向がキルケゴールの実存への共感を呼び起こすが、しかしそれは実存哲学的方法とは異なって、「自然との和解」をめざす批判的主体性という特徴をもち、

その点で、アドルノとの共通性が認められることが指摘される。

第4章「初期アドルノのキルケゴール論」では、ハイデガー哲学への徹底した批判的姿勢から展開される主体性概念の歴史批判的吟味と、「非同一」の主体性および「自然との和解」の確立が論じられ、それが、初期アドルノのキルケゴール受容が批判哲学におけるキルケゴール受容史の総括的な把握という意味をもつものであることが論じられる。

第2部は、批判哲学に共通な歴史における主体性概念に対して、キルケゴールの実存概念における単独的固体性を重視した初期実存哲学の受容の真相を、ハイデガーとヤスパーズの初期思想を中心に、両者の没後公開された資料をもとにして解明している。

第1章「ヤスパーズとハイデガーにおける初期の論争点」では、20年代早期に両者の間で交わされた思想的論議の核心がキルケゴール解釈の問題であり、両者の受容上の決定的な差異がキルケゴールの「宗教性」理解に由来することが明らかにされる。

第2章「『存在と時間』におけるキルケゴール思想の軌跡」では、ハイデガーの『存在と時間』の実存論的カテゴリーにおけるキルケゴール思想との内在的関係が、「瞬間」「反復」「本来性と死」「不安」の各実存論的用語に分けて検討され、キルケゴール固有の「宗教性」理解がハイデガーの存在論のうちへと換骨奪胎されていく過程が論じられる。

第3章「初期ハイデガーの受容－『存在と時間』以前－」では、ハイデガー最晩年に公開された論文「ヤスパーズ「世界観の心理学」への論評」に基づいてキルケゴール思想をめぐるハイデガーとヤスパーズの論議の所在が確認され、(第1節)、またアリストテレス研究として公開された『ナトルプ報告』および諸講義録等によって、とくに哲学と神学との差異をめぐる解釈学的問題が明らかにされると同時に、最初期の時間論の形成にかかわる「先」の構造とキルケゴール思想との深い関係が明らかにされる。(第2部)。さらに、第2部全体を補完する意味で、改めて『存在と時間』をとりあげてハイデガーとキルケゴールの関係を時間論を基軸にして明らかにするとともに、ハイデガー哲学の由来をキルケゴールにあるとみなしたK.レーヴィットの資料に基づいて初期ハイデガー周辺の思想状況とキルケゴールの思想との関係を当時の精神的背景から論じている。(第3節)。

結論部では、これまでの論述をふまえて、(1)キルケゴール思想が初期批判哲学の思想の基礎づけの段階で積極的に関与していたこと、(2)初期実存哲学ではキルケゴール思想をめぐるハイデガーとヤスパーズの間で大きな解釈上の亀裂があり、従来の解釈とは異なって事実上はヤスパーズよりもハイデガーの方がキルケゴール思想に深く関与していたこと、(3)初期批判哲学と初期実存哲学の対立の構図はキルケゴール思想の受容をめぐる明確になり、とくに実存哲学への批判哲学の対立的姿勢はアドルノにおける徹底したハイデガー批判に結晶していることを論じている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、実存哲学に偏りがちな従来のキルケゴール受容史研究を根底から捉え直して、キルケゴール受容史上画期的時期とされる1910～1930年代の初期批判哲学と初期実存哲学における受容の実態を、H.ファーレンバッハやM.トイニッセンの先行研究を批判的にふまえて、より包括的に明らかにしたという点で、きわめて斬新な意欲的研究である。

とくに、(1)初期批判哲学と初期実存哲学の分野におけるキルケゴール受容の諸様態を、近年公開された文献資料に基づく系統的な研究を通して明らかにしたこと、とくに70年代から80年代にかけての初期文献の公開にともなう新事実の展開がこの両分野に関する思想史的読み換えを可能にした研究史上の画期的意義を明らかにしたこと、(2)初期批判哲学におけるキルケゴール受容の研究については、従来マルクス主義的な基調に基づいて消極的否定的評価を受けがちであったが、それに対して、新たにキルケゴールの「主体性」概念に基づくルカーチから

アドルノに至る批判哲学の発展史のなかでのキルケゴール思想受容の積極的意義を提起したこと、(3)初期実存哲学の受容について、従来ヤスパースとハイデガーの思想的相違が有神論と無神論との区分などの図式で振り分けられてきたが、新たにキルケゴールの「宗教性」から彼らが受容した「実存」概念の歴史的意義を明らかにしたこと、(4)キルケゴール受容をめぐる初期批判哲学と初期実存哲学の緊張関係を系統的、比較論的に明らかにしたこと、こうした指摘および論証の内容は注目すべき新しい成果であり、キルケゴール研究に重要な寄与をなすものと認めることができる。

しかしながら他面において受容史研究にともなう若干の問題がないわけではない。キルケゴール思想の批判哲学と実存哲学における主体的受容は、当然キルケゴール思想の変容をともなうが、本論文ではその変容がキルケゴール思想そのものに対してどう関係ないし意義が必ずしも明確ではない。受容され変容を受けたキルケゴールの思想像をキルケゴール思想のいわば原像ともいうべきものからもう一度捉え返すという視点も必要のように思われる。また、ドイツにおける最初期のキルケゴール受容の問題、それと批判哲学および実存哲学における受容との関係についての言及があれば、ドイツ思想史のなかでの意義を一層明確にできたように思われる。なお、唯名論と実念論の関係、アドルノの「犠牲」および「イロニー」の概念の分析にやや曖昧な点が見られる。

以上のような問題点があるとはいえ、新たな資料に基づいて斬新な知見を提起した本論文は、今後キルケゴールを研究する者にとってはもちろん、この主題にかかわる領域の研究者にとって不可欠の文献となることは確実であろう。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。